

当時のローマの教会では、どうもユダヤ人信徒と異邦人信徒との間に、互いの優劣をめぐっての軋轢が生じていたようです。宣教者パウロは、そんな教会の人々に対して「自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合い（原意：尺度）に応じて慎み深く評価すべきです」と語りました。お互いの対立には、自己評価の仕方が大きく関わっており、それを信仰の尺度から行うようにと勧められています。信仰の尺度から見えてくる一人ひとりの存在価値について、パウロは次のように語りました。「わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです」。その上で、パウロは「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい」（10節）と勧めるのでした。

ところで、イエスは、最も重要な掟として「隣人を自分のように愛しなさい」と教えました。この掟を実践しようとする時につまずくことの一つは、「自分のように」という点ではないかと感じます。誰しもが、自分自身を愛せている訳ではないからです。むしろ、嫌な部分や破れを抱えており、自分自身を好きになれないという場合が多いのではないのでしょうか。あるいは、自分を愛していたつもりでも、それは驕り高ぶりに過ぎなかったと気付いたり、思いもよらぬ出来事一つで、突然、自分の存在価値を見失うという場合もあるでしょう。それゆえ人は、他者を見下し、「自分を過大に評価」することで、自分の存在価値を保とうとする手段を身につけていくのかもしれない。自分を愛せないから、隣人を愛せないということがあるのだと思います。そんな私達に、十字架のイエスが身をもって示されたのは、それでもあなたを愛し、赦しておられるという「神の憐れみ」でした。

マザー・テレサは、「『あなたを愛している』というイエスの言葉を聞かずに、たとえ1日たりとも生きながらえることはできません。体が呼吸を必要とするくらいに、私達の魂はその呼びかけを必要としているのです」と語りました。人は、自分で自分を価値ある存在として偏りなく評価したり、愛することを根源的に難しくしています。だからこそパウロは、キリストの体を成すかけがえのない部分としてあなたを憐れみ、必要としておられる神の眼差しから、自分を慎み深く評価するようにと促しています。その神の愛にこそ心を傾けながら、「自分を変えていただき」、隣人への愛を神に献げる新しい生活へと押し出されていく者でありたいと願います。

（文責：望月達朗牧師）

